

『古事記』・『日本書紀』は天神（あまつかみ）が日向に降臨し、その直系の神武天皇が奈良盆地に東征して本拠と定め、ここから全国を平定して、奈良朝廷になったと記す。古代史の研究者の間では、『記紀』の《天孫降臨》と《神武東征》は、《奈良盆地に生まれた勢力》の由来を《天上の神》に結び付ける神話に過ぎないが、日本列島では唯一この《奈良盆地に生まれた勢力》が王朝と呼べる国に育ち、奈良朝廷になったと見る史観が《定説》となっています。

だから『書紀』は、「九州は天神が降臨して以来、近畿王朝の支配下にあり、527年に磐井の反乱があったがこれも平定した」と記し、新しい処では、『筑紫大宰』の語を推古天皇17年の609年に載せ、664年・665年には『水城』・『大野城』・『基肄城』を造ったと記す。《定説》に従う研究者はこうした『書記』の記述をそのまま認め、「九州に近畿王朝とは異なる勢力が存在したかもしれない……」という疑問を持つことはありません。そうして、「推古の時代以来、大宰府の地に、近畿王朝として守らねばならぬ都城があった」という考え（思い込み）があるようです。

解説：磐井の乱（いわいのらん）は、527年（継体天皇21年）に朝鮮半島南部へ出兵しようとした近江毛野率いる大和朝廷軍の進軍を筑紫君磐井（『日本書紀』は筑紫国造だったとする）がはばみ、翌528年（継体天皇22年）11月、物部麁鹿火もののべのあらかひによって鎮圧された反乱、または王権間の戦争。磐井の乱に関する文献史料は、ほぼ『日本書紀』に限られているが、『筑後国風土記』逸文（「釈日本紀」巻13所引）や『古事記』（継体天皇段）、『国造本紀』（「先代旧事本紀」巻10）にも簡潔な記録が残っている。

なお、『筑後国風土記』には「官軍が急に襲撃してきた」となっており、また『古事記』には「磐井が天皇の命に従わず無礼が多かったので殺した」とだけしか書かれていないなど、反乱を思わせる記述がないため、『日本書紀』の記述はかなり潤色されているとしてその全てを史実と見るのを疑問視する研究者もいる。出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

しかし、唐は新羅と連合して663年に朝鮮半島の白村江で日本と百済の連合軍を破ると、百済に、『熊津都督府』を、筑紫に、『筑紫都督府』を、新羅に、『鷄林大都督府』を、置いた。さらに唐は、668年に高句麗を滅ぼし、20万人を捕虜として中国に連れ去って勢力を削いだ上、高句麗に、『安東都護府』を置く。唐に連行された高句麗人20万人は奴隸として使役され、二度と郷里の土を踏むことは有りませんでした。

後に元（1271～1368年）は半島の高麗（936～1392年）を属国とし（1259年）、日本に遠征するときは属国の高麗を徹底利用した。1274、1281年の二度に亘って、高麗に軍船を千艘規模で建造させたうえに、一万人規模で高麗人を日本遠征に動員しました。このため高麗では、山から木がなくなり、船を造るために多くの国民が使役され、徴発され

た軍人は半数近くが帰還せず、食糧生産に携わる農民が不足して、攻められた日本以上の苦境に陥ったと云います。

世界史上で、《他国の属国になる》とは、このような扱いを受けることを意味します。このとき日本は、時の執権・北条時宗が、「降伏せよ」と恫喝する元の要求を退けて戦う道を選び、元の属国となることを免れました。これは武士が勇敢に戦ったためであり、「神風」の幸運に助けられたためであることも、良く知られています。

さて、《定説》の近畿王朝一元史観に立つ古代史学者は、「九州に近畿王朝と異なる別の勢力の存在した」ことを認めません。だから、「唐と戦ったのは近畿王朝で、近畿王朝は確かに負けた」、しかし、「『書紀』を見ても、その後、唐とは友好関係を保っており、日本が唐に占領されたとは記していないし。高句麗や、後の高麗のような扱いを受けたとも記していない」、「ここから見れば、『筑紫都督府』とは、近畿王朝の置いた『筑紫の大宰府』の唐風の呼称に過ぎず、『大宰府政庁』や『都府楼』の語も同義である、と理解しています。

しかし、事実はどうだったのでしょうか？

「唐と戦って敗れ、唐に拠って『都督府』が置かれるという事態が如何なる事態を意味するか？」は、『書紀』の叙述に拠るのではなく、中國史の視野で見なければいけません。

そのとき、もし、「日本列島が近畿王朝によって統一されていて、近畿王朝が唐と戦って敗れた」のなら、唐は、唐と戦って破った百済と高句麗の本拠に『都督府』・『都護府』を置いて唐の属国としています。なので同じ様に、近畿王朝の本拠の奈良盆地に『日本都督府』を置き、近畿王朝を属国としたと考えられます。

「唐が筑紫に『筑紫都督府』を置き、近畿王朝の日本（やまと）が唐の占領を免れている」という事実は、「『旧唐書』が記すように、600年代の日本列島には（倭国）と（日本国）の二つの主権国家があり、唐と戦って敗れたのは、九州にある王朝の（倭国）であって、近畿王朝の（日本国）は唐との戦いには加わらなかった」ことを示していると考えられます。これは『書紀』の脚色（潤色）と思われます。

663年の白村江における敗戦の後、筑紫には唐の『筑紫都督府』が置かれ、唐の占領軍が滞在しています。だから664、665年に、唐の占領軍の面前で、『書紀』の記すように、唐の侵略に備える軍事施設を造れる訳がなく、『水城』・『大野城』・『基肄城』を造ったのは、唐の占領軍の撤退以後と考えられます。

さて半島の新羅は663年に唐と連合して戦い、勝利を収めたのに、敗戦国の百済・倭・高句麗と同じく、唐の属国とされたのだから面白くない。ところが、670年、唐は西の吐蕃（チベット）に突如攻め込まれて大敗を喫します。吐蕃軍40万に対し、迎え撃つ唐軍は10万だから敵う訳がない。吐蕃は「唐が東の朝鮮半島に掛かり切っている」と見て攻め

込み、念願の西域を手に入れようとした。世界情勢は油断ならない、この西域での情報を得た新羅は、直ちに、朝鮮半島に駐留する唐の占領軍への攻撃を開始する。新羅にとって唐は宿敵の百済・高句麗を滅ぼし、うるさい倭を半島から駆逐してくれた恩人であるが、しかし、属国扱いは不本意で、新羅は「これから唐は西の吐蕃で忙しくなる」と見て、唐からの独立戦争の拳に出た訳です。

朝鮮半島が戦闘状態となれば、唐としては半島の先の海を越えた筑紫に、『筑紫都督府』を置いて占領軍を維持することは難しくなって、新羅との戦争が始まった2年後の672年、唐の筑紫占領軍総司令官・郭務悰は日本から帰国し、これ以後、『書紀』に『筑紫都督府』の記事も、唐の占領軍の記事も見えなくなります。すなわち、唐は日本列島を放棄して撤退したと考えられます。

半島における唐・新羅戦争は670年から6年続きます。新羅は着々と武力で旧百済領と旧高句麗領を支配下に収めていき、唐の占領軍は劣勢に立たされ、そして唐にしてみれば東の果ての朝鮮半島より、西域の方が重要だったようで。676年、唐は終に『安東都護府』を遼東に移し、これを東の最前線として、朝鮮半島から全面撤退します。これで新羅は念願の半島統一を果たしました。（統一新羅時代、676～936年）。

しかし、唐は吐蕃との戦争（670～704年）に集中するため、半島から手を抜いたに過ぎず、吐蕃戦争が片付けば、いつ朝鮮半島に対し復讐に出てくるか分からない。新羅は唐が半島から撤退すると、直ぐ、唐に「謝罪使」を送って戦争行為に出たことを謝罪し、《唐の年号》を採用して《唐の冊封体制》に留まることを誓う。新羅は自身のメンツを捨てて唐のメンツを立て、唐の復讐を避けようと考えたのである。そして唐（618～907年）はその後、二度と朝鮮半島に軍隊を送ることはありませんでした。新羅は戦いだけでなく、外交でも勝利した事になります。

百済と高句麗は唐に敗れて半島から消え。筑紫、すなわち九州にあった王朝は唐に敗れて半島への足掛かりを失い、滅亡への道を歩む。唐は結局、半島から退き、《骨折り損のくたびれ儲け》に終わった。600年代後半の朝鮮半島の動乱は、唐を半島に引き入れてその力を借り、半島の統一を成し遂げた《新羅の一人勝ち》に終わったのであります。

さて、『日本書紀』に拠れば、672年5月に郭務悰が帰国すると、7月に天武が《壬申の乱》を起こす。天武はこれに勝って、《日本列島の全権》を掌握する。乱の後、近畿王朝では褒賞が行われ、宴会に次ぐ宴会が催され、《大団円》となって、天武は終に《神》とまで呼ばれるまでになります。

しかし、《壬申の乱》は近畿王朝内部のクーデターに過ぎません。天武はこれに勝って、何で、九州までの全権を掌握出来たのでしょうか？《九州にあった王朝》、すなわち『旧唐書』に言う《（倭国）の王朝》は白村江で唐と新羅の連合軍と戦って負けた。

しかし、《九州にあった王朝》は近畿王朝と戦って負けた訳ではありません。
唐が9年間の筑紫占領を切り上げて、672年に撤退したのであれば、《筑紫の支配権》は、当然には、現地のもとの支配者である《九州にあった王朝》、すなわち《（倭国）の王朝》の残存勢力の許に戻ると思われます。

朝鮮半島の場合、新羅は6年にわたって唐の占領軍と百済と高句麗の残存勢力と戦い、武力で半島の統一を果している。しかし『書紀』に、近畿王朝と《九州にあった王朝（倭国）の残存勢力》との間の戦いは見られません。《筑紫の支配権》が、《九州にあった勢力》から、何もしていない近畿王朝に交代する事（理由）は、考えられません。なのに何故、天武は《九州にあった（倭国）の残存勢力》の支配権まで手に出来たのでしょうか？　ここが、《壬申の乱の謎》です。

近畿王朝一元史観の学者から見れば、「九州に王朝など存在せず、日本は近畿王朝の基で統一されていた」のだから、「ここに何の《不思議》も有ろう筈がない」のは分かりますが。しかし、九州王朝史観を採る研究者が、「九州に王朝があった」と主張するのであれば、この《壬申の乱》は《謎》であり、この《謎》を説明する必要があります。「天武は近畿王朝内のクーデターに勝っただけで、何で、九州までの全権を掌握出来たのか？」「九州王朝はどこに消えたのか？」「やはり九州王朝など無かったのか？」

ではこの《壬申の乱の謎》を考えます。
唐は、周辺国を戦争で負かして直轄領とし、これを統治するとき、その本拠に『都督府』を置いて《羈縻（きび）政策》を採る（注2）。
《羈縻（きび）政策》とは、中国に友好的な現地人の有力者を中国の官吏である「都督」に任命し、その「都督」を現地人に対しては「王」となし、唐の武力を背景に住民を統治させる方式を言う（注2）。つまり、唐の傀儡（かいらい）政権を置くのです。

唐は属国とした半島に『都督府』を置いて《羈縻政策》を採っています。筑紫にも半島と同じに『筑紫都督府』を置いており、当然、《羈縻政策》を採ったと考えられます。「では、唐が『筑紫の都督』に任命した現地人は誰だったのか？」

近畿王朝の歴史書『日本書紀』はこの辺の事情を一切語りません。「『書紀』は近畿王朝以外の王朝の存在を認めない、日本全土は一貫して近畿王朝の支配下にあった、との建前を採る」。その近畿王朝は唐とは戦っておらず、負けてもいない。「その近畿王朝の支配下になく王朝が九州に存在し、その王朝が独自に唐と戦って敗れ、占領された」など、『書紀』に記す訳がない。記せば、「『書紀』の近畿王朝一元史観は即、崩れる」。だからこの処は『書紀』に頼らず、別個に考えるしかありません。

《九州にあった王朝》は唐と敵対して戦った。しかし、同じ民族の近畿王朝は、遣唐使を派遣して唐と密接に接触した挙句に、唐との戦いを忌避した。であれば、唐は、友好的

であった近畿王朝の「王族」の一人で、九州に縁故を持つ人物を、『筑紫の都督』に任命したのではないか？

もし近畿王朝がこうして『筑紫都督』のポストを手にしたなら、近畿王朝は唐の占領軍を後ろ盾にし、労せずして《九州の支配権》を手に入れることになります。
《戦うことなく》、《禅譲を受けることもなく》、列島を統一出来たことになります。
そこで唐が筑紫から撤退すれば、それこそ、《願ってもない事態》です。
このように突き詰めて行くと、「天武こそが、『唐の筑紫都督』であったのではないか」という考えに辿り着きます。

天武は九州の有力豪族・胸形氏の娘との間に長子・高市皇子を設け、壬申の乱で九州の豪族を味方に付けている。すなわち、天武は九州王朝の本拠の九州にいたことがあり、九州に強いゆかりを持っている。

唐は、近畿王朝の王族の一人で、九州にゆかりを持つ天武を『筑紫都督』に任じた。中国側は天武を『筑紫都督』と呼んだ。しかし、近畿王朝は天武を『筑紫大宰』と呼んだのかもしれませんが。

『大宰・総領』の呼称は日本側の呼称であり、九州王朝が、白村江前夜まで、筑紫の長官と、九州王朝の配下にある周防・伊予・吉備の王に用いたものである。
そして唐が日本列島から去り、『筑紫都督』の天武が近畿王朝の天皇位に就くならば、天武は即、九州にある王朝と近畿王朝、双方の実権を併せ持つことになります。

しかし天武は近畿王朝の皇位継承権は持たなかった。だから天武が近畿王朝の天皇位に就くにはクーデターに拠るしかなかったのではないか。
そしてまた天智天皇の娘を妃にせねばならなかったのではないか。
それも四人とも全部を妃にし、競争相手を排除する必要があったのではないか。

皇位継承権を持たない近江出身の継体が天皇位に着くためには、前天皇・仁賢の娘、手白香皇女を娶って入り婿となって王朝内の合意を得る必要があったように、天武もまた前天皇・天智の娘を娶り、入り婿となる必要があったのではないのか。

その証拠に、間違いなく、天皇になるための正当な権限を有していたと見られる天智は、天武の娘を娶ったりしてはいません。

『書紀』が「天武を天智天皇の弟で皇太子とした」のは、「継体を応神五世とした」のと同じで、『書紀』の脚色（潤色）ではないのか。

『書紀』は「天武は天智の弟で、皇太子として次期天皇を約束されていたのに、天智が実子の友皇子を後継にと考えるようになり、命まで狙われては蜂起せざるを得なかった」と言う。これも勝てば官軍の「良く出来た大義名分」と見るべきはないか。

以上のように考えれば、《壬申の乱の謎》は全て説明が付きます。

天武は「天智天皇の弟」という隔絶した生まれにありながら、中央の近畿王朝政権では何の地位にも付いていません。それに、天智の後継が問題となった時点で、突如として姿を現します。

そもそも、天智には大友皇子他の実子があるのに、「弟の天武が天智の皇太子に定められていた」ということ自体、何の必然性も考えられない、不自然な話ではないでしょうか。つまり、「元々、天武は天智の皇太子であった」というのは、反乱を起こした、つまり秩序を乱した天武の側に、後付けで大義名分を付加しようとしたものではないのか、と考えられるのです。

もっとも、近畿王朝の誰かが唐から『筑紫都督』のポストを得たのであれば、天武本人が『筑紫都督』でなくとも、近畿王朝が唐を後ろ盾として九州の支配権を手中にしたことに変わりはありません。

しかし天武が天智の弟でなく、皇位継承権も無かったとすれば、『筑紫都督』ででもない限り、「何で天智の実子と皇位を争うまでの力を蓄えることが出来たか？」の説明が付きません。

天武は九州王朝の王族の一人ではなかったか、と考えることも可能です。しかし、天武は近畿王朝側の王族でない限り、近畿王朝内のクーデターに顔を出せる立場ではなく、もし、天武が九州王朝側の王族ならば、ズバリ、九州王朝と近畿王朝の闘いとなって、九州王朝側に勝ち目があるとは思えない。だから、やはり、「天武自身が『筑紫都督』であった」とする思い付きが捨て難いのです。

『書紀』に拠れば 671 年 10 月、天智の病が重くなり、天武は近畿王朝に召喚される。ここで天武は、天智と大友皇子に恭順を誓う。しかし、余りに大きな九州における実権を握ってしまった天武は、近畿王朝内で敬遠された。危険を察知した天武は髪を剃って、吉野に隠遁する。そして、671 年 12 月、天智は近江宮で崩御する。

翌 672 年 5 月、唐の占領軍総司令官・郭務悰が帰国する。この九州での変事を天武が伝え聞いていたかどうかは分からない。そこは分からないが、近畿にいる天武は筑紫の唐の占領軍には頼れない。天武に残された道は、「座して死を待つか」、「大友皇子を切るか」、二つに一つ、ここは自ら道を切り開くしかない。

天武は東国へ逃げた。こうしてドラマは 672 年 7 月の《壬申の乱》へと繋って行く。天武は東国に掛けた、が、東国の豪族にしても天武に着くか、否か、ここは掛けであった。しかし、大友皇子は若く、天武は既に大王としての智力と風格を供えていた。そして、天は天武に微笑んだ。

さて、唐が『筑紫都督府』をどこに置いたか？ は分かっていない。先に述べたように、近畿王朝一元史観の学者は、『筑紫都督府』を近畿王朝が置いた『大宰府政庁』と同一視しているが、これは論外と言うしかない。

唐は 663 年の白村江で筑紫と百済の連合軍を破り、筑紫を占領した。その唐が、占領軍総司令部として『筑紫都督府』を置くのに、博多湾からの大陸軍の襲来を恐れる必要は無い。だから、博多の背後の山の陰の窮屈な「大宰府」の地を選ぶ理由は無い。朝鮮半島を経由して大陸から武器等の物資の補給を受け、軍人が半島と往来するときの利便性を考え、いざというときには半島に素早く逃げ帰ることを考えるなら、当然に、博多湾岸に置く事が考えられます。

672 年その唐が筑紫から撤退し、天武が《壬申の乱》に勝って日本列島の全権を掌握する。これまで筑紫の防衛は《九州の王朝》自らが行ってきたが、近畿王朝政権は、ここで初めて筑紫防衛の当事者となる。唐は撤退した、しかしいつ再来するか分からない。だからその再来に備え、博多湾岸ではなく、その背後に、『水城』や『大野城』の防衛施設を整備し、これに守られた山の陰の大宰府の地に、本土防衛と九州統治の本拠として『大宰府政庁』を置いたと考えられます。

近畿王朝政権の『大宰府』は、672 年以降に置いた『水城』や『大野城』とセットにして始まった。『書紀』・『続日本紀』に拠れば、このとき近畿王朝は、この 2 城を含め、対馬の『金田城』から本拠の奈良の『高安城』まで計 11 基の山城を築いて防衛ラインを敷いている。

さて、九州王朝史観では、1979 年に、『大宰府』の歴史を 400 年代の九州王朝の倭の五王以来のものと見て、「九州王朝の本拠は大宰府である」と主張した（注 3）。「冒頭に挙げた『書紀』の推古の時代の『大宰府』の初出記事と、『水城』・『大野城』・『基肄城』設置の記事は九州王朝の事跡であり、『書紀』はこれを近畿王朝のものとして剽窃した」と考えた。

この「仮説」をそのまま受け入れる九州王朝論者は多い。その一人、内倉武久氏は「大宰府は日本の首都だった」と言う。これは古田武彦氏の「九州王朝の本拠は大宰府である」の主張を言い換えたに過ぎない（2000 年、注 4）。

近畿王朝一元史観の定説派は「大宰府」を〔近畿王朝の出先機関〕で、〔600 年代初めの推古以来のもの〕と言い、九州王朝史観では、その『書記』の記述は九州王朝の歴史を剽窃したもので、「大宰府」を〔400 年代の倭の五王以来の九州王朝の本拠〕だと言う。

両者で、「大宰府」を取り合う格好となったが、「大宰府」は 672 年の唐の撤退以後に設けられた近畿王朝の拠点であって、両者の言うほどに古くはありません。

「倭の五王」の時代、中国は南北で争っており、北朝には朝鮮半島の先の海を越え、日本列島までを侵略する余裕はなく。また「倭の五王」は南朝の冊封体制に入っており、南朝の日本侵略など、もとより考えていない。中国の周辺国にとって 400～500 年代の中国の南北朝時代は、中国の侵略を恐れる必要のない安穏な時代だったのです。

そして九州にあった勢力は、300～500年代、朝鮮半島に渡り、伽耶を足場として、百済と新羅に肩入れし、半島に進出しようとする高句麗との間で戦いを繰り広げている。

『書紀』はこの日本列島側の権力主体を近畿王朝であるとしているが、その『書紀』を見ても、日本側に、半島の勢力が海を渡って筑紫を侵略することを警戒する節は見られない。だから、九州にあった王朝としては、博多の背後の大城山の陰の「大宰府」の地に防衛拠点を置くなど考えもしなかっただろうし、王朝の首都を置くのにわざわざこの狭い山陰を選ぶ必要などどこにも無かったのです。

さて九州には『神籠石』と呼ばれる10基の山城が残されている。この『神籠石』は、「筑紫平野を護る」形で配置されており、この筑紫平野に護られねばならない勢力の有ったことを示している。奈良盆地を本拠とする近畿王朝は、その奈良盆地を護るために、間違ってもこのような配置の山城は造りません。

そして、『書紀』・『続紀』はこの10基の『神籠石』を書いていません。さらに、『神籠石』山城は、『書紀』・『続紀』が載せる近畿王朝が造ったという11基の山城とは全く異なる特徴を備えています。すなわち、山城を囲む土塁の外側の根元にブロックを大きくした様な、長径70cmほどの1段の切石の列を延々数kmに渡って備えている。宮地岳だけは3段の切石列を備えているから、10基の『神籠石』の中でも最も丁寧に造られている。一方、近畿王朝が造ったという『大野城』・『基肄城』・『水城』を含む山城はこの切石の列は有りません。

つまり、この『神籠石』を造ったのは、《近畿王朝とは異なる勢力》であり、これこそ《九州にあった勢力》であり、近畿にあった勢力を《近畿王朝》と呼ぶのであれば、《九州王朝》と呼んでも良いのではないかと考えられるのです。

では、九州にあった王朝がこの『神籠石』を造った時期はいつであったろうか？中国は100年代の終わりに後漢が分裂して以来、四百年という長い間、分裂状態にあった。200年代には魏・呉・蜀の三国が争い、魏を継承した西晋が280年に三国を統一するが、その西晋は316年に匈奴に倒される。以後、華北は北方遊牧民族に占領され、漢民族は民族移動して華南に逃げて東晋を創る。439年に鮮卑の北魏が華北を統一してからは、鮮卑族の王朝と、華南の漢民族の王朝が全国制覇を期して対峙する（439～589年）。

この間、周辺国にとっては安泰であったが、589年に隋が南北朝を統一すると事態は一変する。610年隋は流求（沖縄）を蹂躪し、朝鮮半島の高句麗に何十万もの兵力で襲い掛かる。高句麗はとりあえず隋を撃退するが、618年に唐が隋に代わると、唐は630年に北の東突厥、635年に西の吐谷渾（とよくこん）、640年に高昌（ウイグル）を滅ぼして属国にする。こうなると次は朝鮮半島が危ない、高句麗・百済・新羅にとって唐の侵略が現実の脅威となる。

当然、半島から海を越えて直ぐの《九州の王朝》にとっても対岸の火事では済まなくなる。こうして《九州の王朝》は、600年代の前半期に、膨大な労力を費やして、『神籠石』の山城群を造ったと考えられるのです。

このとき近畿王朝はうまく立ち回った。「九州は≪九州の王朝≫が防衛せざるを得ないから九州に任せておけば良い」と高みの見物を決め込み、近畿王朝としては何の防衛体制も取らなかったのである。「もし、九州の勢力が唐と戦って負けたら」、「その場合に備え、唐との戦いには加わらずにいた方が得策である」。

なお、九州勢力の本拠である筑紫平野の西の入口は『おつぼ山神籠石』、南は『女山（ぞやま）神籠石』、東は『杷木（はき）神籠石』で固めているが、肝心要の博多湾からの北の入口を守る『神籠石』がないのです。

ところが、古田武彦氏が「九州王朝の本拠は大宰府である」と主張した20年後の1999年、「大宰府」の南にある低い丘陵地帯を越えた先の「宮地岳」に、『神籠石』と全く同じ特徴を備える山城が発見されました。

この『宮地岳神籠石』は、博多湾岸から「大宰府」を通過して筑後方面に抜ける二日市地峡帯に面し、東の米の山峠を越えて筑豊盆地に至る古代の要路との分岐点にあって、北の博多湾と東の米の山峠方向を睨んでいる。つまり九州王朝は、北の博多湾から侵入する大陸軍に備えて『神籠石』を造るのに、「大宰府」の地ではなく、二日市地峡帯の南方にある「宮地岳」を選んだのである。

この『宮地岳神籠石』の発見により、率直に言わせて頂くなら、「九州王朝の本拠は大宰府である」の仮説は破綻した。もし、「大宰府が九州王朝の本拠である」なら、その本拠の「大宰府」を博多湾から侵攻する敵の面前に晒し、はるか後方の宮地岳に〔逃げ込み城〕を造る訳がない。「大宰府が本拠で、大宰府を守るなら」、近畿王朝がしたように大宰府の真上の大城山に〔逃げ込み城〕の『大野城』を造る」だろう。

「『大宰府』はやはり近畿王朝が白村江の敗戦の後、『水城』・『大野城』とセットで造った近畿王朝の拠点であり、九州王朝の本拠ではなかった」、これが『宮地岳神籠石』の発見により、証明されたと考えます。

多くの方は、「大宰府の平地部分が都城を置くには狭すぎる」ことをご存じない。また、「大宰府の地も、『宮地岳神籠石』の地も、≪同じ地続きの平野≫である」かの如くに錯覚しておられるようである。

なお、現在、『大宰府政庁』跡の地表に見える礎石は、平安時代の第Ⅲ期のもので、その下に奈良時代の第Ⅱ期の礎石群が埋まっている。

さらにその下に第Ⅰ期の、礎石を伴わない掘立柱の建物群がある。「この第Ⅰ期の建物群を倭の五王のものと考えておられる」のであれば、それはあり得ない。

第Ⅰ期の建物群は第Ⅱ期の建物群と関連を持っており、掘立柱の柱根が残っていない。

つまり、第Ⅰ期の建物の柱は全て抜き取られて再利用されているのである。掘立柱は腐るから、今も同じ掘立柱方式を採る伊勢神宮は二十年毎に建て替える。二十年毎は贅沢過ぎるとしても、第Ⅰ期の掘立柱が抜き取られて再利用されたのであれば、第Ⅰ期の建築は奈良時代の第Ⅱ期の建築から見てそれほど古いものではない。倭の五王時代のものである

可能性はゼロである。この第Ⅰ期の建物群も近畿王朝の造ったものであり、古くても 672 年に唐が去って以降のものと見なければならない。

そして「大宰府」近辺における数十回の発掘成果を見ても、都城の条坊の遺構は一切発見されていない。400 年代の倭の五王の時代に遡る遺物も皆無である。

結論を言えば、「唐が博多湾岸に『筑紫都督府』を置いた時点で、大宰府の地に都城は存在していなかった」「それより 200～300 年前の倭の五王やその後の九州にあった王朝の宮は大宰府とは別の地にある」

「『大宰府』の歴史は、672 年の唐の撤退以降、近畿王朝によって始められた」「大宰府が日本の首都であったことはない」これが現在までの「大宰府」の地における考古学上の発掘の成果と、文献の解釈から考えられる事実である。

(2016.7.22)

〔参考文献〕

1. 岩波書店「日本古典文学大系」『日本書紀』720 年
2. 中央公論社「世界の歴史 6」『隋唐帝国と古代朝鮮』礪波護・武田幸男 1997 年
3. 朝日新聞社『ここに古代王朝ありき』古田武彦 1979 年
4. ミネルヴァ書房『大宰府は日本の首都だった』内倉武久 2000 年